

# 2023年トウモロコシ相場の動向 および変動要因について

生産本部 飼料生産部 飼料調達課 笹原千尋

トウモロコシは配合飼料原料の約40%を占め、配合飼料価格に大きな影響を及ぼし、またトウモロコシ相場は天候や世界情勢によって大きく変動します。

'22/'23年産（'22年に作付けし'23年にかけて使用が見込まれるもの）の世界のトウモロコシの生産量は1,150百万トンと見込まれております。割合は、米国が30%、中国が24%、ブラジルが11%です。その中で輸出に向けられるトウモロコシは約176百万トンと見込まれております。例年、米国が1位の輸出国となっていました。当年の割合はブラジルが29%と、米国の27%を抜き1位となる見通しです。一方で、主要輸出国であるアルゼンチンは高温乾燥の気候が続き減産、また、ロシアによる侵攻によりウクライナの期末在庫は逼迫した状態が続いております。加えて、中国のトウモロコシの消費量は年々増加しており、米国に次ぐ生産国でありながら、輸入国としても1位となっています（農畜産業振興機構'23年6/9需給報告より）。

本稿では、'23年トウモロコシ相場の動向をもとに、今後の相場を予測するうえで注目していきたい変動要因を報告いたします。

## 1. 2023年トウモロコシ相場の動向 および変動要因

図1の(1)～(7)は下記説明に該当します。

### (1) '23年1月：上げ基調で底堅く推移

中国のゼロコロナ政策の緩和に伴い、需要の増加が予測されました。米国の生産量および期末在庫が予測を下回り大きく買いが進みました。アルゼンチンにおいて、高温乾燥予報があり、作柄の悪化が懸念されました。

### (2) '23年2月末：下げ基調

米国農務省のレポートにおいて、'23/'24年産の作付面積および単収、期末在庫が予測を上回る結果が発表されました。

### (3) '23年3月末：上げ基調

'23年2月の下げ基調を受け、中国による米国産トウモロコシの大口成約が続き、買いが進みました。

### (4) '23年4月末：下げ基調

ブラジル国家食糧供給公社が発表したトウモロコシの生産量が予測を上回る結果でした。その後、中国の米国産トウモロコシ成約の連続キャンセルが発生しました。これは、中国がより安価なトウモロコシが今後流通すると予測したことが背景と考えられます。中国の動きを受け、相場は大きく下落しました。

### (5) '23年5月中旬：大きな下げ基調

バイオエタノール需要の増加や、ロシアの黒海輸出合意離脱の懸念を背景に一時的に上げ基調になったものの、その後のレポートで米国期末在庫が上方修正されたこと、ロシアが黒海輸出合意を延長したことで相場は大きく下落しました。

### (6) '23年6月下旬：上げ基調

生育状況が注目される米国中西部において、乾燥予報があり、作柄悪化が懸念されました。

### (7) '23年7月上旬：下げ基調

生育状況が注目される米国中西部において、降雨が予報されました。また、米国農務省が発表した作付面積が予測を上回る結果でした。



図1：2023年9月渡しのトウモロコシの相場の動向  
(出典：CME Group) (単位：セント/ブッシェル)

## 2. 米国産

米国農務省は毎月、米国および世界の穀物の需給状況を発表しています。ここでレポートされる各穀物の作付け・収穫面積や単収、需要内訳や輸出量、期末在庫率の情報は今後の相場を予測するうえで重要視されています。

米国は世界1位のトウモロコシ生産国で、その期末在庫が注目されます。期末在庫率が10%（1か月強の在庫）を割り込むと需給がひっ迫した状態にあると考えられています。'12年は干ばつの影響で一時5%になったことから、相場は史上最高値を更新しました。直近の期末在庫率は'22/'23年産で10.21%、'23/'24年産で15.62%と徐々に回復しています（米国農務省'23年7/12発表）。

また、天候も注目されます。図2のとおり、米国の夏季は生育期にあたり、9月からの収穫期に向けその作柄に注目が集まります。トウモロコシの主要生産地域である中西部における天候の予測は、今後の作柄・生産量を予測するうえで重要なトピックです。乾燥や台風の予測は相場が上げ基調に、降雨の予測は下げ基調に転じる傾向があります。特に生育期の乾燥や収穫期の台風は作柄・生産量に大きな影響を与えるため、天候情報で相場が大きく変動する傾向にあります。

	作付		収穫										
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
米国													
ブラジル1期作													
ブラジル2期作													
アルゼンチン													
南アフリカ													

図2：トウモロコシの日本向け主要輸出国のクロープカレンダー

## 3. ブラジル産

ブラジルは春に収穫期を迎える1期作と夏に収穫期を迎える2期作があり、1期作のほとんどはブラジル国内で流通し、生産量の多い2期作が輸出向けに出回ります。2期作は6月から9月にかけて収穫期となり、収穫期間は日々の収量のレポートが注目されます。

'23/'24年産の生産量は96百万トンと、昨年度の86百万トンを超える豊作となる見通しです（農畜産業振興機構'23年6/9需給報告より）。この見通しを背景に相場は下げ基調に転じる傾向にあります。一方で、

ブラジルのトウモロコシは大豆の動向と深い関連があります。ブラジルはトウモロコシと大豆の輪作を行っており、本年は大豆も豊作の見通しとなっています。ここで懸念されるのは物流です。ブラジル内陸部から輸出港、そして輸出施設のキャパシティがひっ迫し、現在は大豆を積む船が港で滞っている状態です。7月以降は収穫されたトウモロコシの輸出も始まります。通常、大豆の輸出を終えてからトウモロコシの本格的な輸出が始まりますが、本年は大豆の輸出が終わる前に、トウモロコシの輸出の時期が来てしまい、物流が一層混乱する可能性があります。物流の混乱は輸出業者のコスト増加に繋がることから、価格を下支えする要因となることが考えられます。今後は生産量に加え、物流状況にも注視していく必要があります。

## 4. その他の要因

先述のとおり、中国の穀物消費量は年々増加しております。中国の食文化の変化から食肉需要が増加し、それに伴い飼料需要も増加していることが要因です。配合飼料の主要原料であるトウモロコシや大豆を自国の生産量では賅うことができず、輸入量が増加しています。世界の需給状況に対し、トウモロコシおよび大豆の輸入量1位の中国の動向の影響は大きいいため、相場が大きく変動する傾向にあります。

また、輸入穀物を扱ううえで、為替は飼料価格に大きく影響します。'22年度、米国の金融政策から金利の上昇が続きました。一方で日銀が金融緩和策を継続した結果、日米金利差が拡大し円安が進み、'22年10月には一時150円/ドルを超えました。過去の為替の平均は、'21年度が110.80円/ドル、'22年度が132.43円/ドルでした（MUFGより）。仮に300ドル/トンのトウモロコシを円に換算した場合、'21年度と'22年度の間で約6,500円/トンの差が生じます。このように、為替の変動で価格は大きく変動します。日銀の金融緩和政策が継続される場合、米国の利上げや、米国の消費者物価指数（CPI）が予測より高くなる場合に円安ドル高が予測されます。今後も米国および日本の金融政策や、消費者物価指数（CPI）などの経済指標への注視が必要です。

配合飼料原料に使用している穀物の大部分は輸入品です。輸入品の価格は相場や為替によって変動し、その変動要因も天候や世界情勢など多岐にわたります。今後も品質の安定した飼料原料の調達を行い、配合飼料の製造、販売に努めて参ります。引き続き当社製品をご愛顧の程、よろしくごお願い申し上げます。